

「風の盆 アルバム」 越中八尾「風の盆」を訪ねて

2005.9.2.夜 富山県 越中八尾 by mutsu Nakanishi



町並みを吹き抜ける二百十日の大風をおさめ、五穀豊穡と永世の繁栄を祈るため、
叙情豊かに、気品高く 唄い踊り継がれる 風の盆



長囃子（前囃子）

囃子
歌（上句）
歌（下句）
囃子



越中で立山 加賀では白山
駿河の富士山 三国一だよ
歌われよ わしゃ囃す
おわら踊りの 笠きてござれ
忍ぶ夜道は オラワ 月明かり
きたさのさ どっこいさのさ

.....囃子と歌が交互に続き.....

うたわれよう~ わしゃ はやす

八尾よいとこ おわらの本場 二百十日を オワラ 出て踊る

.....囃子と歌が交互に続き.....

春風吹こうが 秋風吹こうが おわらの恋歌 みについてならない

うたわれよう~ わしゃ はやす

富山あたりか あのともしびは 飛んで行きたや オワラ 灯とり虫

見送りましようか 峠の茶屋まで 人目がなければ あなたのへやまで

.....囃子と歌が交互に続き.....

長囃子（後囃子）

浮いたか瓢箪（ひょうたん） かるそに流るる
行先ア知らねど あの身になりたや

風の盆 ビデオ <http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/walk2/owara2005.avi>聞名寺 風の盆 <http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/walk2/monmyo.avi>

毎年、お盆が過ぎ、台風ニュースが聞かれるようになると「越中おわら 風の盆」
夜明かして静かに踊る風の盆 哀調をおびて静かに流れる胡弓の音とおわらの節をゆっくり聞きたくて
9月2日越中八尾で夜明けしました。 そのアルバムです

なにを言っているのか良く判らないが、その節回しと哀調をおびた胡弓の音にひきつけられたのが、「越中オワラ節」との最初の出会い。

そして、高橋治氏の小説「風の盆恋歌」を読んで 益々増幅。

毎年9月1日から3日間越中八尾の街の辻々でこの「おわら」が唄い踊られ続けられ、その深夜 ひっそり静まり返った街に流して歩く下駄の音と共に胡弓に載せた「おわら」がまるで 時間が止まったように静かに流れて行く。

話の筋よりもそんなイメージに魅せられ、9月1日には是非 越中八尾へ・・・と。

そして、4.5年前に一度家内とでかけ、その雰囲気の素晴らしさに魅了されました。

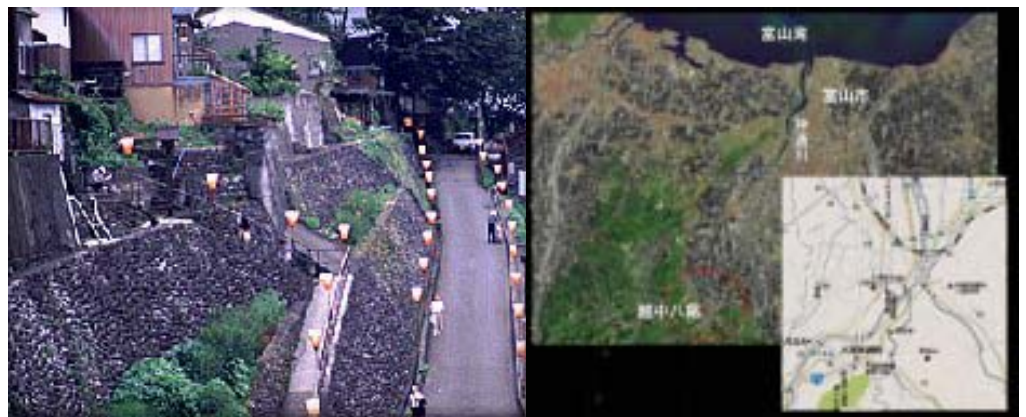
でも もうその時にも人が街にあふれていて、残念ながらイメージした静かな「おわら」は味わえず。

街では朝まで、辻々で静かに踊り継ぎ 流して歩くと聞いたのですが、街に未練を残しながら帰りました。

夜中八尾の駐車場に帰る暗い道すがら、遠くから聞こえてくる「おわら」に耳をそばだて、次は八尾で夜明けかししようと・・・

「越中八尾」は富山を流れる神通川に沿って高山線を南へ 田園の中を約20分 飛騨の山群に分け入る所にあるひっそりと静かな街。

八尾の駅から福島の家並みを抜け、井田川を渡ると旧八尾の町並み。



まっすぐ奥に伸びる細い

坂道と脇そして路地。そこに古ぼけた家並みがぎっしりと立ち並び、「風の盆」の時をのぞいては喧騒のない田舎の落ち着いた街である。

飛騨の山裾の一角 神通川に流れ込む支流井田川の標高100メートル前後の河岸段丘に位置し、北東から南西に上り坂が続く。浄土真宗の古刹・聞名寺の門前町として成立し、藩政時代から地場産の蚕種や和紙の取引を中心に商人町として栄えた。そして、



10町内に分かれ、各町内におわら保存会の支部があり、現在では川向こうにあたる福島にも支部があるという。

2005年9.2. 久しぶりに「風の盆」にでかける。

どんよりとした晴れ 今年湿度が多いのか 立山連峰も全く見えず、蒸し暑い。

昼過ぎに富山の駅に着くと「越中八尾」の臨時列車がピストン運転並に出しており、乗車する列車の整理券を配っている。駅はごった返し、「おわら」のメロディーが流れ、スピーカーの案内がひつきりなしに流れている。富山で「風の盆」があるのではなく、また まだ 昼なのにすごい。

八尾で「風の盆」町流しが始まるのは7時 八尾から富山へ帰る臨時の最終が11時過ぎと聞く。

以前にも増して八尾の街は観光客であふれ、深夜でないで静かな「風の盆」は味わえそうにない。

どうせ夜明けかし夜遅く八尾へ・・・と。

魚津の埋没林や「発掘された日本列島 2005」展をやっている富山埋蔵文化財センターに行き、7時過ぎに満員の臨時列車に乗り、薄暗くなった八尾駅に降り立つ。

駅から八尾の街に至る道筋にはぎっしり、屋台が立ち並び、人の並がつづく。井田川の橋を渡ると奥へと延びる坂道の両側に家並みが続く八尾の街。益々人並みが多くなって、もうお祭りの雑踏を神社へ上って行く感じ。とても街流しの踊りの列が動けるとは思えない。



以前来た時には一番奥の広場に舞台が組み、舞台での出演が済んだ組から町流しが始まっていたので、とにかくそのあたりまで・・・と。

1. 聞名寺 風の盆

坂道の続く街の中心部の左手に「聞名寺」があり、大きな本堂を舞台にして「聞名寺 風の盆」が始まる所。

「風の盆」と書かれた提灯が左右に掲げられ、まず念仏と仏様のライハイがあって、胡弓の音と越中おわら節の囃子に乗って 淡い光の中で、静かに踊りが始まった。



「越中で立山 加賀では白山 駿河の富士山 三国一だよ
歌われよ～ わしゃ囃す～」
久しぶりの「おわら節」に聞き惚れる。

幕開けにはぴったりのこんな「風の盆」が催されていたとは まったく知りませんでした。が、「仏壇の上での庶民的な舞い」といった感じで、街流しの「風の盆」とは又違ったあじわい。

薄暗い本堂の正面で無言で踊る人を通して 背後のご本尊が見え、哀調を奏でる胡弓と唄の節回しが時空を止める。

「八尾はもともこの聞名寺の門前町。寺の信者によって念仏踊りが踊られた。それが、「風の盆 越中おわら」踊りのルーツの一つ」と浴衣姿で眺めていた隣の御仁が教えてくれる。

あっというまに、周囲は人でぎっしりになりました。



越中八尾 聞名寺 風の盆 2005.9.2夜

おわらの歴史

おわらの歴史は古く、元禄のころ。

生活の中から見いだした喜びを面白おかしく表現しながら、町を練り歩いたことが町流しの始まりという。しかしその多くの表現は、当時の庶民生活の実態をそのまま露骨に唄ったものだったため「このままでは伝えるより先に滅んでしまう」。そう感じた芸達者な人々は、歌詞を改め、新しい詞の間に「おおわらい(大笑い)」の言葉を挟んで踊った。これが、おわらの語源といわれる。

また一説によれば、農作物の収穫の時期に豊年を祈り、おおわら(大藁)とも。

かつて風の盆は、お盆の8月中旬に行われていたらしいが、当時暦の主流だった太陰暦から、太陽暦へ統一されたことを機会に、旧暦のお盆にあたる9月初旬に改められたといわれている。

越中八尾観光協会「越中八尾 風の盆」ホームページより

<http://www.city.toyama.toyama.jp/yatsuo/nourin/owara/>

「おわら」が「おお笑い」からきていると聞くとあの独特の笠・男踊りのメリハリついたポーズ そして、無数にある歌詞 かえうたもどきの面白さなど実に楽しい。

ほかの民謡にもそんな傾向がある。

そういえば、青森の「ねぶた」も 「暑い「ねむい」夏」がルーツとか.....

風の盆も 「街を流す静かな踊りだけでは 若い人はついてゆかないだろうなあ・・・」と思っていたのですが、劇場・舞台用の華やかなポーズ°をつけた男女組みの踊りがあって、若い人が中心に朝まで神社や特設舞台で自由に踊っていました。

この哀調を帯びた静かな型の踊りの中に自由奔放にポーズを付けて踊る仲間の面白さ 隠れた中にある自由奔放さが若い人をひきつけるのかも知れない。

それはまた、「風の盆」の良さに吸い寄せられて見物する我々にもあるのかもしれない。



2. 町流し・輪踊り

30分程聞名寺の風の盆を見て 街の通りをさらに登る。もう 人・人・人。
また 家並みに沿って夜店が並ぶ。祭りの雑踏を歩いているようなもの。
もう とくに「町流し」が始まっていないといけないのに・・・・・・。
あっちの路地 こっちの路地と貰った地図にある踊り場のある各町を巡るが踊りに行き当たらない。



風の盆
町流し

2005.9.2.夜
西町・東町周辺で



やっと西町周辺で街流しの踊りが始まった。でも あふれる人並みをかき分けての「街流し」である。
ざわついているが、ぼんぼりが立ち並ぶ通りをおわらの囃子に合わせて 笠で顔を隠した女踊りの一団が優雅な手さばきを見せ、男踊りがポーズを決めながら進んで行く。 耳には心地よい三味線と胡弓とおわらの節。 こんな雑踏の中だと思うのですが、見ている人と踊り手が一体になっている。頭の入らぬアングルで写真をとろうとするのですが、ダメ。 先回りして 先頭から・・・と人を掻き分けるのですが、ダメ。 本当に雑踏の中の街流し。

ひとしきり 踊りが進んでストップすると我に帰って拍手が起こる。人並で前へ進まなくなったらしい。ほかの町でも街流しが始まっていると路地を巡ってゆくのですが、いっこうに出会えず。

どうやら余りの人並みに各町の街を巡る街流しが進まず、それぞれの街の踊り場での踊りに切り替わったようだとの声えが聞こえてくる。

前回来た時には 家の前に床几を出して、そこで気楽に胡弓を引いたり、街角で小さな輪になって踊っている人たちがいたりで、それを取り囲んで じっくり聞くという風情だったのですが、人並みにもう消されてしまった様である。

街角の踊り場のあちこちで少人数の踊りの輪が出来、おおぜいの人々がそれを取り囲んでいる。

また、西新町では長い通りいっぱい一つの輪になって、観光客も輪の中に入っての踊りが始まった。

衣装の揃った一団の踊りを見るのとはまた違った街の取り組みである。

でも、やっぱり、おわらの囃子にあわせて揃った衣装をつけて、整然と踊る姿がやっぱり美しい。

整然とそろって 街を流してゆく姿を見たいと思うのですが、中々出会えず。

八尾では各町それぞれで、その街の踊りを取り仕切っているのので、どんな場所でどんな風に踊るのか その場に言ってみないと判らないという。

風の盆
輪踊り



諏訪町の街角で



今町の街角で



通りいっぱい町の人観光客もみんな一つの輪になって踊る西新町で

3. 町流し 諏訪町・東町で

石畳の道の両側にうだつのある家並みが整然と建ち並び八尾の観光スポット 諏訪本町にやってきた。道の両側に並ぶぼんぼりが坂道の奥まで続く家並みを一層美しいものとしている。



諏訪本町の家並み 2005.9.2. 夜

やつぱり、人でごった返して、両側の道には諏訪本町の「街流し」を見ようと座って待っている人たちが並んでいる。

「もう、1 時間半以上待っているが、まだ街流しが始まらない。この街で見るのが一番素晴らしいと聞いてずっとここで待っている。バスの集合まであと1時間 何とかみれないか・・・」と。

私も隙間に入れてもらって、話をしながら 30 分程休憩して待つが、始まらない。町の入り口の方でお囃子がかすかに聞こえるのですが、近づいて来ない。

10 時をまわって、人並みも落ち着いてきたようである。様子を見るのも兼ねてまた、街の中を歩く。

鏡町の階段のところにも、沢山の人が座って踊りの始まるのを待っている。諏訪町に戻る途中で 踊りに参加する若い女の子に「諏訪町の街流し この辺まで来ますか・・・」と聞くと「遅れて参加するので、様子は良く判らないが、入り口のあたりだけで、奥まで来れないだろう。」という。町筋の奥でずっと座って待っている人たちに声をかけたほうが良いのか??? 迷うところ。昨日は奥まで「町流し」があったという。



諏訪神社での諏訪町の踊り

諏訪神社のところにもどると境内の踊り場での踊りが丁度終わるところで、隊列を整えた諏訪町の街流しが始まり、坂を踊りながら登ってゆく。

随分 人の数が減って まじかですと街流しを見られた。



諏訪町
街流し

諏訪町から少し坂を下ったところで、東町へ帰る東町の街流しにも出会う。

東町 町流し



4. 街流しを終えて 深夜 街で 自由に

午前1時をまわると八尾の街の交通規制が解かれて 自動車が入るので、通りでの街流しや輪踊りも一旦終わるという。もう 夜店も閉まってあれだけ多かった人並も少なくなって、さすがに坂を下る人が多くなるが、まだ、これからと坂を登ってゆく人も多い。12時をまわって、踊っていた人や囃子方も一区切りなのか、挨拶が交わされ、積所や家に休みを取りに行く。

さすがに歩きつかれて、川原か駅に一度戻ろうと静かになった街をきよるきよる眺めながら坂を下る。今町では通りを舞台にして 若い踊り手が待ち流しとは違った舞台型の少人数の踊りを披露している。街流しでは一瞬ストップのポーズをとって踊るのは男踊りであるが、女踊りでもポーズをとって 本心に優雅に踊っている。観客は街の人中心になった気軽さもあるのか、すげがさも脱いで、自由に仲間の踊りを楽しんでいる。 囃子方のおわらも静かな街に一層良く響く。

路地の端に腰をおろして、眼を閉じて耳をそばだてる。あのおわら節独特の哀調を帯びた節まわしが本当に心地よい。踊り手の優雅な手さばきにもつつい見とれてしまう。



今町で 若い人たちが街角を舞台におわらを披露

下新町の坂を車がどんどん上がってくる。もう ひとしきりは街では流せない。
でも それぞれの町では路地の角や神社の境内などで朝まで踊り継ぐと聞く。

下新町の八幡神社



下新町の八幡様にはお囃子方が大勢集まり、また 若者を中心に踊り手も集まって、おわらの踊りがはじまった。 街流しの大勢の人の揃った踊りとは別の若者らしい感情がそのまま胡弓の音に乗って、薄暗い境内の舞台にぼっと浮かび上がって美しい。

おわらに乗った踊り手のひとつひとつのしぐさの美しさがたまらない。

おわらがもともと芸者衆の唄踊りの即興的な組み合わせから始まったと聞かすが、その「やらしさ」が取り除かれて、実に優美な踊りに見える。踊り手の若者が生き生きして 踊りを楽しんでいるのが判る。

もう 自己陶醉の世界のように見えて、うらやましい。



井田川の橋より、深夜の八尾の街 坂道のぼんぼりが美しい

午前2時前 さすがに疲れて、八尾駅へ行けば 夜明かしてできるだろうと橋のたもとまで戻る。
めっきり人通りも少なくなって ぼんやりとしたヤマノシルエットを背景に点々とぼんぼりのあかりが坂道を登っている。もう 福島の街はひっそりして誰も通っていない。
駅の中では 大勢が仮眠をすでにとっていて、暑苦しい。駅の外の方がまし。
駅前の駅舎の横で足をのぼして、うつらうつらしていると、大きな声で唄を歌いながら若者達が駅前を走り抜けて行く。15分ほど置いて また別の集団が走り抜けていく。この街の若者達が自分達の風の盆やつて、エネルギーを発散している。 やっぱり川渡らんと自由にだけへんのかなあ。。。などと納得。
しばらくすると北の方からかすかにおわらのメロディが聞こえてくる。
起き上がって、駅の直ぐ北の特設舞台の処にゆくと、30名ほどの若者達が中心に深夜の風の盆を楽しんでいる。舞台の前では寝転んだり、すわったり、思い思いのスタイルで夜明かすする人たちが、一緒にこのおわらを楽しんでいる。



深夜 福島の特設舞台で
八尾駅前 福島町

さっきはどうも、八尾の街に町流しに行っていた若者が走って、この舞台に帰ってきたようだ。お酒もだいぶ入って、おわらの囃子に舞台に上がった 若者達が男女ベアーになったり、男ばかりだったり、女ばかりだったり、次々とおわらを披露して、ポーズを決めている。拍手が起こり、自由奔放である。舞台上で踊った連中が終わると囃子方にきっちり頭をさげて 礼を言っているのもさすがしい。自由奔放とはいいいながら、この舞台でも福島町の統制が取れている。こんな深夜の楽しみがあるから、きっちり形の決まった町単位の町流しにも若者達もついてゆけるのか・・・夜がうっすらと明ける 5 時前まで踊りは続き、若者の一人が終わりの挨拶をして、2 日目の舞台風は終わり、おわらを唄いながら それぞれタクシーに分乗して、帰っていった。終わりまで きれいだっただ。

春風吹こうが 秋風吹こうが おわらの恋歌 みについてならない
 富山あたりか あのともしびは 飛んで行きたや 灯とり虫
 見送りましょうか 峠の茶屋まで 人目がなければ あなたのへやまで

5. 見送り

6 時 7 分初 富山行始発にあわせて、駅に戻るともう駅には行列が出来ている。

どうも、始発列車に乗るひとばかりではなさそうである。駅員の方が教えてくれたのですが、始発の列車が入ってくると若者達がホームで「おわら」を踊って、見送ってくれるという。それがまた人気となって、多くの人が見に来るのだという。

私は富山行の列車に乗る列に並ぶ。どんな趣向か 興味深深。

始発列車が入ってきて、列車にみんな乗り込みおわると、「おわら」の若者達が駅のホームに立ち 「おわら」を踊りだす。ホームの外の柵にはカメラの放列。そんな中をゆっくりと列車は動き出して、八尾を離れた。

趣向といえば趣向なのですが、これとても自然発生的に生まれたものが、そのまま受け継がれてきたという。

「哀調を帯びた胡弓 おわらの唄にのせた優雅な踊 静かさを味わい踊る。それが風の盆」



インターネットで見つけた見送り風景



キャッチフレーズ そして 観光客もそれにあこがれるが、この人の並はそれを打ち消してしまうほど。段々静けさが損なわれつつあるが、なんといいても、その事を街の人たちが意識して、観客を余り意識せず、自分達の祭りを街ぐるみで楽しんでいるのがいい。

時間をはずせば、いっしょにそんな静かな風の盆をたのしめるのがいい。

今後どうなつてゆくか判りませんが、このブームとなった「静」の部分をお願いしてほしいものである。

また、若者の参加が多く、それぞれの町が独自性を持っていることこれも魅力の一つ。

いろんな場所で色々な形で「風の盆」が共有されているのがいい。

そんなことを考えながら、昨日の夜から今朝まで八尾で過ごした「風の盆」を思い返していました。

やっと「風の盆」の面白さが見えてきたように思う。

次回は是非、 諏訪町や鏡町のひと気のない深夜をひっそりと流す胡弓や囃子方 そして深夜の町流しをじっくり、街角に座って、味わいたいと思っている。

始発富山への列車で 居眠りしながら

2005.9.3.朝 Mutsu Nakanishi